

「スポーツ嫌いの中学生を半減」目標に反発

朝日新聞 2017年6月1日

スポーツが嫌いな中学生を現在の半分に減らす——。スポーツ庁が掲げた目標に、一部で反発の声が上がっている。嫌いなままじゃダメですか？

「余計嫌いになる」

スポーツ庁の昨年度の調査によると、運動やスポーツが「嫌い」か「やや嫌い」な中学生は16・4%。微増傾向にある。このままでは将来、運動しない大人が増えてしまうと、同庁は3月、5年かけて8%に半減させる目標を「スポーツ基本計画」の中で打ち出した。



この計画が報じられると、「強制しないでほしい」「余計嫌いになる」「嫌いで何が悪い」などの意見がネット上で飛び交った。

スポーツが嫌いになるのは、体育の授業にも原因がありそうだ。フジテレビのトーク番組、「久保みねヒヤダこじらせナイト」には、視聴者からの投稿による人気コーナー「体育への恨みつらみ川柳」がある。出演者の漫画家の久保ミツロウさん、音楽家のヒヤダインさん、文筆家の能町みね子さんが全員体育嫌いだったことで意気投

合し、生まれたコーナーだ。記者が取材を申し込んだところ、番組内での「公開取材」を求められ、3人の言い分を聞くシーンが5月上旬に放送された。

恥かかされるから

ヒヤダインさんは「体育が嫌なのは恥をかかされるから。周りに迷惑をかけている申し訳なさ、馬鹿にされているんだろうなという自虐。ネガティブな感情ばかりが渦巻くんです」。能町さんは「体を動かすこと自体が嫌いなわけじゃない。うまい人とやるから嫌いになる。レベル別に完全に分けてくれればいいのに」と提案する。

市民ランナー向けの雑誌「ランナーズ」を発行する「アールビーズ」の広報・小川久美子さんも、学生時代は吹奏楽やオーケストラに熱中し、体育の成績は「2」だった。しかし10年ほど前、「自分の時間が欲しい」とたまたま始めたのがランニング。100キロのウルトラマラソンにまで挑戦するようになった。すっかりスポーツが好きになり、「子どもの頃の自分が知ったらびっくりするでしょうね」。

やりたい時がくる

旗振り役のスポーツ庁にも、体育嫌いの過去を持つ人はいる。

学校体育を担当している平井明成総括官も学生時代、体育は「2」だった。球技の授業は「補欠」、水泳は休むこともあったという。

そんな平井さんも、今ではときどきジムに通って汗を流す。「年を取ると運動したくなるものなんです」。確かに、スポーツ庁の世論調査によると、「週1回以上運動する」人は70代が最も多く、65・7%。「体を動かすことは衣食住と同じように生きる上で大事なこと。やりたいと思った時、少しでもうまくできる方がきっと楽しいですよ」と体育嫌いの子どもたちを励ます。剣道部だった平井さんが思い出すのは、中学1年の1学期だけ指導してくれた若い臨時教員の男性。教え方が的確で上達を実感でき、楽しかったという。「指導者との出会いは大切。そういう人材を増やしていきたい」と話す。

スポーツ庁の鈴木大地長官は、1988年ソウル五輪競泳金メダリスト。反発の声に「普段どうしてもスポーツが好きで推進する立場の人の意見ばかり耳に入ってくるが、これからは嫌いな人の意見ももっと聞かないと」と話している。(伊木緑)